

くにたち しらべ



NO. 8

発行日 2009 年 9 月 1 日

編集＝くにたち図書館地域資料ボランティア

発行＝くにたち中央図書館

テーマ

ようふくじ おうぜんじ えんじょういん 『永福寺・應善寺・藤井山圓成院』

現在国立市にあるお寺は、南養寺、永福寺、慶善寺、滝の院の4つです。明治以前には、安楽寺、藤井山圓成院がありました。本編では、永福寺、慶善寺、藤井山圓成院について紹介します。南養寺、滝の院、安楽寺については、別に「くにたちしらべ NO.3, 6」で紹介されています。

1. 永福寺 (谷保6877)

宝林山永福寺は、矢川通り（地蔵街道）から甲州街道を左折左側の、久保地区の一角にあります。臨済宗建長寺#1 派立川普济寺#2 の末寺#3 で、南養寺#4 の下寺#21 にあたります。(*6)



図1 永福寺本堂

開山は建長寺177世、普济寺6世、南養寺10世の高僧天叟宗祐大和尚禅師で、開山は、寛文（1661～1

673）年間の創立です。木造の一尺（約30cm）ばかりの釈迦如来像が本尊ですが、別に不動明王像などが安置されています。

寺歴によれば、「万治2（1659）年、立川普济寺の明陰焜座元禅師隠居す」とあり、当初は俗に言う隠居寺#22 だった寺が、その後次々と檀家が増え正式の形を整えたものと思われます。開祖座元和尚は寛文7（1667）年5月に没しています。

常憲院殿より除地#5 4石2斗を賜ると、と伝えられています。(*4・P168,*6)



図2 永福寺位置

1-1 行事

年間をとおして種々の行事があり、南養寺とほぼ同じです。主な特徴ある行事について紹介します。

1) 修正会^{しゅうしょうえ}

一年の一番初めに行われる寺院の年頭法会を、修正会（しゅうしょうえ）と呼びます。1月1日～3日間、毎朝1時間ずつ大般若経祈願が行われます。

2) 涅槃会^{ねはんえ}

2月15日は釈迦の命日で、涅槃会（ねはんえ）が行われ、本堂に涅槃図^{#9}を掲げます。涅槃図は戦後にもたらされた新しいものです。1980年頃までは、永福寺にも御詠歌^{#7}講中があって、久保の檀信徒の婦人たちで組織されていましたが、この日には、涅槃図の前で御詠歌を唱和しました。

3) 不動縁日

永福寺には、不動明王像が祀られており、かつては、毎月28日の不動の縁日にお祭りが行われておりました。（*4・P195）

4) 南養寺・永福寺の遠鉢^{えんぼつ}

臨済宗建長寺派の総本山である建長寺では、僧堂の若い修行僧らを各地に派遣して托鉢修行をさせるしきたりがあります。遠方への托鉢なので、これを「遠鉢（えんぼつ）」といいます。春秋の彼岸の頃、雲水らがやってくるので、同宗寺院の南養寺、永福寺はこれを共同で受け入れ世話をします。10年に1度位順番が回ってきます。（*8・P7）

5) 棚経^{たなきょう}

地元地区においてのみ盆中の棚経^{#8}回りが行われています。

6) 施餓鬼会^{せがきえ}^{#10}

永福寺では、例年7月27日に施餓鬼会が行われています。出席する14人の僧は、南養寺の時と同じく同宗の東京一部教区（西多摩西部教区）の、普済寺門中に属する寺々の住職です（国分寺市の満福寺、国立市の南養寺、永福寺、日野市の宝泉寺・万福寺、小平市の小川寺、東村山の正福寺、立川市の普済寺・龍泉寺・常楽院、昭島市の広福寺・福源寺、町田市の万松寺・宝泉寺）。

1-2 境内にある石造物

1) 地藏菩薩#11

基地入口の上屋の下に地藏菩薩2基が安置されています。共に丸彫りの立像で錫杖と宝珠つちのえいぬを持っています。左側の立像は円形台石に「享保三（1718）戊戌天二月念日 奉建立地藏菩薩 為無縁法界 當村念佛講中 施主十五人」とあり、念佛講#12の人達が世の中すべての人々の為に建てたもので、念日は20日です。右側は故人の菩提の為に昭和15（1940）年に建てられ、銘文は像の裏にあります。現在は寺で面倒をみえています。（*7）



図2 地藏菩薩

2) 馬頭観音#13

墓地の階段状に並んだ無縁塔群に、下部を欠損した光背#14型の馬頭観音像があります。像の両側に「文化十三（1816）子八月日 高尾目留原 馬持中」と彫られています。高尾 留原は現あきる野市。なぜここにあるのかは不明。馬頭観音は憤怒相が特徴ですが、これは慈悲相に彫られ、一般に一面二臂像の場合に多く見られます。（*7）

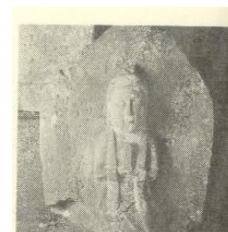


図3 馬頭観音

2. 應善寺 (東2-2-1)



図4 應善寺

應善寺は浄土宗真宗本願寺派#15（通称西本願寺派）に属します。本尊は阿弥陀如来（木像）で、江戸時代初期のものと思われる。

中央線国立駅から約3分、東方、旭通りに面して建立されています。国立地区開発を契機として、昭和5（1930）年6月、中央区築地から移転開山しました。

コンクリート製の本堂の屋上に、木造銅板葺きの三重塔と鐘楼が、昭和55（1980）年に建てられました。蒼く緑青が吹いた屋根と洗い出しの古さにじむ本格的な三重塔です。正面からはあまり見えませんが北側の通りから全景が見えます。（*9）

寛永10（1630）年廊念によって開基されました。徳川三代将軍家光時代の創建で、国立にきてからの歴史は浅いのですが、通算は約400年近い古い寺歴をもっています。

昭和26（1951）年に起きた文教地区指定



図5 應善寺位置



図7 三重塔と鐘楼

運動の際には、寺が一つの中心として市民運動を支えたことでも知られていません。

大正 12（1923）年の関東大震災^{#16}までは、築地本願寺地中寺院の一寺でした。

築地本願寺が、江戸別院として日本橋横山町に創建されたのは元和 3（1617）年です。当時は「浜町御坊」と呼ばれていました。

当時の地中寺院は 18ヶ寺が、ありましたが、この中に應善寺が含まれていたかどうかは、その後の再三の火災のために記録が焼失してはつきりしていません。

明暦 3（1657）年の火災^{#17}の時、浜松御坊も焼失しました。有名な振袖火事ともいわれるときです。

翌 4 年、本願寺は築地に移転再建しました。この時の地中寺院は 58ヶ寺あり、その中に、應善寺の名が記録されております。

関東大震災には、本願寺もまた全焼しました。

東京市は、その復興計画の中に、築地に魚市場を建設することを決めました。このため、寺院環境としては不適當なものになり、應善寺は、当時の本願寺の布教方針、即ち、寺院を分散して教線の拡張を図る、という積極的な意図に沿い、当国立に移転してきたものです。（*2,*4・P168）

應善寺の特徴ある行事について紹介します。（*9）

1) 宗祖降誕会・

5月21日は浄土真宗の宗祖親鸞聖人の降誕日で、應善寺では、その前後の日曜日に宗祖降誕会を行います。

2) 歡喜会

浄土真宗の教義には、盂蘭盆^{#9}に家々の先祖霊が帰ってくるという考え方は、全くないので、基本的には盆という行事・法会は行われません。施餓鬼会^{#10}もありません。しかし應善寺では、今は亡き人を偲んで報恩・感謝をしようという趣旨での法会が盆中になされており、それを歡喜会（かんぎえ）・お盆法要と呼んでいます。例年7月16日の午後6時から行われます。

3) 終戦記念日の鐘・戦没者法要

8月15日の終戦記念日には、應善寺では、世界平和を祈る鐘がつかれることになっています。本堂3階にある鐘楼で、この日の午前11時50分から住職が鐘を打ち鳴らし始め、寺をあげて平和への祈りがささげられます。鐘は1

0打を打つことになっていますが、1打を1分位にゆっくりと間を開けて打っていき、10打を打ち終えた頃、ちょうど正午になるようにしています。

4) 報恩講 (ほうおんこう)

浄土真宗の年間最大の法会は、宗祖親鸞聖人の入滅日に行われる報恩講 (ほうおんこう) です。本来の日取りは、本願寺の場合、1月16日とされており、本山ではその日に盛大な報恩講が挙行されますが、各末寺ではその1ヶ月前までに行われます。應善寺では、例年11月第三～第四日曜に行われています。

5) 除夜の鐘

大晦日の深夜、午後11時頃から本堂で除夜の法会がもたれます。午後11時20分頃から除夜の鐘の受付が始まり、鐘をつきたい信徒は申し出ます。鐘楼は本堂の3階にあります。鐘は何回ついてもよく、数は決まっています。浄土真宗の考え方では、人間の煩惱の数は数えることができないとされているからだといわれます。

3. 藤井山圓成院 (跡地 谷保1622 現存せず)



図8 藤井山圓成院跡

享保の頃(1720～)上谷保村地内に、藤井山圓成院という黄檗宗#19の寺院がありました。現在は跡として小さな祠が祀られています。

場所は史跡城山と谷保天満宮の中



図9 圓成院跡位置

間にあたる旧甲州街道の南側で、千丑地区の立川段丘が谷保田圃に南面した処です。

(矢澤大拳) 矢澤大拳(大賢)は関東鋳物頭矢澤宗永の子として延宝4(1676)年谷保村で生まれました。10歳で出家、臨済宗分派である黄檗宗の実山道伝和尚の弟子となり、18年の修行のち、28歳の春に師実山道伝から藤井山圓成寺の住職に命じられました。宝永2(1705)年の秋に、相模国の石蔵山浄業寺の末寺であった圓成寺を廃して、武蔵の黄檗宗海福寺を本寺とする藤井山圓成院を、上谷保村に開きました。

(本尊) 師の実山から贈られた運慶作の火除千手観音像を本尊とし、実山を祖としました。やがて実山のあとをついで開山二代目となった大拳は、師の意志をついで寺の発展に尽くしました。



図2-44 矢澤大拳坐像(小平市円成院)

図10 矢澤大拳坐像

当時、上谷保村には、臨濟宗の谷保山南養寺、同宝林山永福寺ようふくじの二院があり、下谷保村には、谷保天満宮の別当寺梅香山安楽寺他六坊があつて、開山はしたが、圓成院檀家檀徒は、少なく寺院の経営も楽ではありませんでした。

(新田開発) そこで大拳は、新田#20 開発により宗勢の拡大をしようと、幕府から新田開発の許可を得よう奔走しました。享保7(1722)年上谷保村の矢澤籐八ら11名と百姓寄合を作り、新田開発にあたり、小平市野中新田500ヘクタールの基礎を築きました。新田開発の際、享保9(1724)年上谷保村から通



図 11 野中新田四田組概略 (*1 より)

野中(とおりのなか)(現小平市)へうつされ、翌日には毘沙門堂の遷宮祭が行われました。さらに翌年毘沙門堂が南野中(現国分寺榎戸新田)に分祀されました。大拳は南野中に末寺として正徳3(1713)年に鳳林院をもうけてその開祖となりました。上谷保村からの足がかりになる寺として開山したのではないかとされています。

種々の事情により、藤井山圓成院は、野中への引寺#23が認可され、享保12(1727)年野中山圓成院と号することになりました。

このとき、観音堂一棟だけが、安楽寺に売却されました。これは、後に寛政5(1793)年谷保山南養寺に移されました。同観音堂は、揚額に「大悲殿」とあり、金属の釘を一切使用しないという太鼓胴という特殊な建築になっています。

(野中圓成院)

野中圓成院は、現在も新田の地域の大きなお寺の一つとして小平市に存在しています。



図 12 野中圓成院

語句の説明・解説

- #1 臨済宗【りんざいしゅう】禅宗の一派。中国の臨済義玄に由来し、宋代には黄竜派と楊岐派に分れて禅宗最大の勢力となった。日本へは1171(承安1)入宋した叡山の覚阿が楊岐派を伝えたのが最初であるが、その系統は定着せず、本格的には栄西を待たなければならなかった。その後、入宋僧や来日僧によって多くの流派が伝えられ、室町期になると五山制度の確立と相まって中央に勢力を築いた。しかし、その系統は応仁の乱以後衰え、替って南浦紹明^{なんぽしやうみん}の大応派が厳しい禅風によって進出した。江戸時代にこの系統から白隠慧鶴^{はくいんゑいかく}が出て、今日の臨済宗の基礎を築いた。(*12)
- #2 建長寺【けんちやうじ】鎌倉市にある臨済宗建長寺派の大本山。5代執権北条時頼が宋から蘭溪道隆(大覚禅師)を招いて1253(建長5)に創建。五山制度が確立すると鎌倉五山の第1位となった。
- #3 立川普濟寺【たちかわふさいじ】立川市柴崎町にある。玄武山と号し、臨済宗建長寺派。文和4(1355)年立川宗恒が、物外可什を開山として創建。その後立川氏の香華所として栄えた。江戸時代には幕府より20石の朱印状が付され、境内には緑泥片岩による国宝の六面石幢(せきとう)(延文6(康安元1361)7月6日銘)があり、開山像は応安3(1370)年の銘をもち重要文化財である。参考新編武蔵風土記119(*15,*16)
- #4 南養寺【なんようじ】谷保山と号し、立川普濟寺の末寺で、貞和8(1347)年、物外可什和尚により開山されたといわれます。武蔵国における禅宗、臨済宗建長寺派に属し、教線拡大に重要な拠点でした。詳しくは「くにたちしらべ No.3」を参照してください。
- #4 末寺【まつじ】本山の支配のもとにある寺。所属寺院、本寺の対。本寺に所属、統制される寺で、江戸時代に本寺制度が確立して以降、末寺の性格が固定した。(*22)
- #5 除地【じよち】江戸時代、朱印地・見捨地以外で、租税を免除された土地。(*11)
- #6 涅槃図【ねはんず】釈迦の入滅する情景を描いた図。仏涅槃図とも。入滅前後の8場面を描いたものを八相涅槃図という。涅槃会(常楽会)の本尊として懸けられ、平安時代の横長形式から鎌倉時代には縦長形式に変化していった。高野山の応徳3(1086)年銘のもの(国宝)が著名。(*12)
- #7 御詠歌【ごえいか】巡礼または仏教信者などがうたう、和歌・和讃にふしをつけたもの。巡礼歌。西国三十三所の御詠歌など。(*11)
- #8 棚経【たなきょう】盂蘭盆会^{うらんぼんえ}に、精霊棚^{しやうりやうだな}の前で僧が経を読むこと。(*11)
- #9 盂蘭盆【うらんぼん】梵語 ullambana 倒懸と訳され、逆さ吊りの苦しみの意とされるが、イランの語系で靈魂の意の urvan とする説もある)盂蘭盆経^{もくれん}の目連説話に基づき、祖霊を死後の苦しみの世界から救済するための仏事。陰暦7月13日~15日を中心に行われ、種々の供物を祖先の霊・新仏・無縁仏(餓鬼仏)に供えて冥福を祈る。一般には墓参^{たままつり}・霊祭^{たままつり}を行い、僧侶が棚経^{たなきょう}にまわる。地方により新暦7月・8月など日が異なる。盆。うらんぼん。盂蘭盆会。精霊会。(*11)
- #10 施餓鬼会【せがきえ】俗にオセガキ(御施餓鬼)ともいう。盆を迎える前に諸精霊・餓鬼・無縁仏などいっさいの亡者に施しをして、慰霊・供養をするための法要。
- #11 地藏菩薩【じぞうぼさつ】釈尊の入滅後、弥勒みろく仏の出生するまでの間、無仏の世界に住して六道の衆生を教化・救済するという菩薩。像は、胎蔵界曼荼羅地藏院の主尊は菩薩形に表されるが、一般には比丘形で左手に宝珠、右手に錫杖を持つ形が流布。中国では唐代、日本では平安時代より盛んに尊信される。子安地藏・六地藏・延命地藏・勝軍地藏などもある。地藏。地藏尊。(*11)
- #12 念仏講【ねんぶつこう】極楽往生を目的として共に念仏を修し、成員の葬儀や追善など往生のための

相互扶助を行う同信者共同体。中国六朝期に盧山慧遠の白蓮社という先例があるが、日本では平安中期頃から迎講・往生講・阿弥陀講の名で見えている。その行業・行儀は、986(寛和 2)比叡山横川の住僧を成員として結成、後に源信も加わった二十五三昧会に発する。次いで聖の定覚によって京都蓮台野に伝わり、中世初期には高野山や南都元興寺極楽坊にも講が見られた。以後民間の聖の活動によって庶民も多く参加するようになり、また地方へも広まった。(*12)

- #13 馬頭観音【ばとうかんのん】 江戸時代に馬の保護神として広く信仰された
- #14 光背【こうはい】 仏像の背後につける光明を表す装飾。後光をかたどったもの。頭後にある円形または宝珠形のを頭光、身後にある楕円形のを身光、頭光と身光とを合せたものを挙身光という。(*11)
- #15 本願寺【ほんがんじ】 真宗本願寺派の本山。親鸞の娘覚信尼が京都東山に建立し、関東の門弟に寄せた親鸞の大谷廟堂に由来する。覚信尼の孫覚如は、関東門徒の管轄下にあった本願寺の留守職(住持)を自身の子孫が相伝する権利を訴訟により獲得し、以後その子孫が住持となる。1465(寛正 6)山門衆徒により破却され、80(文明 12)山科に再建されたが、その焼討(1532)以後は大坂に移転(石山本願寺)。大坂退去の後、1591(天正 19)豊臣秀吉が寄進した京都七条堀川に移転し、現在の西本願寺となった。1602(慶長 7)七条烏丸に東本願寺が別立し、現在に至る。(*12)
- #16 関東大震災【かんとうだいしんさい】 関東地方を襲った大震災とそれにとまなう大火災。1923.9.1 午前 11 時 58 分に、関東地方南部を大地震が襲った。震源地は相模湾北部で、マグニチュードは 7.9。多くの建物が潰壊し人々が圧死したが、被害を大きくしたのは東京・横浜市内で出火した火災で、1 日から 3 日未明まで燃えつづけ、東京市の場合 134 か所から発火、家屋を焼き、焼死する人々が相次いだ。死者 9 万人、負傷者 10 万人、行方不明 4 万人。また、全壊家屋 12 万戸、半壊 12 万戸、焼失家屋は 44 万戸、罹災者は東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城、静岡、山梨の府県 340 万人に及んだ。9.2 に発足した第 2 次山本権兵衛内閣は、即日戒厳令を布き、軍隊を出動させ治安維持にあたらせた。また、7 日に支払猶予令・暴利取締令を出し経済的混乱を防いだが、震災手形の多くは回収不能となった。諸外国からの救援が相次いだが、震災の混乱のなかで流言が発生、不安におののく人々が自警団を結成して朝鮮人を虐殺した。その数は、6000 人に及ぶとされている。王希天をはじめ、中国人にも虐殺の手は及んだ。労働運動家の平沢計七ら 10 人が軍隊に虐殺された亀戸事件、無政府主義者の大杉栄・伊藤野枝らが、憲兵の甘粕正彦に殺された甘粕事件も起った。12 日に帝都復興に関する詔書が出され、遷都は見送られたが、東京・横浜は壊滅状態となり、都市機能は完全に麻痺した。近代文明への懐疑と、近代化のいっそうの加速という両面を生み出し、関東大震災は社会や世相が大きく変る転機となった。(*12)
- #17 明暦の大火【めいれきのたいか】 1657(明暦 3).1.18 に江戸の本郷丸山本妙寺の失火から発し、翌日まで続いた大火。振袖火事・丸山火事・丁酉火事とも。1.18 には、北は柳原から南は京橋、東は佃島・深川・牛島新田まで延焼した。このとき吉原も全焼した。1.19 には、小石川鷹匠町から出火し、大名屋敷などを焼き、ついで江戸城本丸・二丸・三丸も炎上させた。さらに麴町からも出火し、桜田一帯を焼き、火はそこから二手に分かれ、一手は通町に、一手は愛宕下を経て芝浦に至った。これによって大名屋敷 160、旗本屋敷 770 余、町屋は両町で 400 町が焼失し、10 万人以上が死亡したという。この火災については放火説もあるが、真偽は不明。(*12)
- #18 浄土真宗【じょうどしんしゅう】 親鸞を開祖とする浄土教の一派。略して真宗。名称は真実の浄土教の意で、親鸞がその師匠法然の教義を表した語。法然の専修念仏の教義を親鸞から伝えられた弟子たち

により真宗諸派が生れたが、中世には時宗などとともに一向宗とよばれ、近世も一向宗とよばれた。関東の弟子達は各々、高田真仏を祖とする高田門徒(高田派)、荒木源海を祖とする荒木門徒、和田信寂を祖とする和田門徒などの門流を形成し、荒木門徒の勢力は畿内・西国へと伸び、#仏光寺派が分出し、和田門徒から三門徒派が分出した。関東の弟子達は、親鸞の娘覚信尼から寄付された親鸞廟堂(大谷廟堂)を共同で所有していたが、鎌倉末に覚如がこの廟堂相伝の権利を獲得し、本願寺派が成立した。本願寺派は蓮如の時に発展、近世には本願寺派(西本願寺派)・大谷派(東本願寺派)に分派し、ともに大教団となる。こうしていわゆる真宗十派の基礎が形成された。蓮如は〈信心為本〉など親鸞の教義の独自性を強調し、さらに近世に教学の研究が進み教義は厳密化した。1774(安永 3)浄土真宗の宗名公称を幕府に申請したが果たせず、1872(明治 5)に真宗の宗名を許され、1946 年本願寺派が浄土真宗の宗名を称することになった。(*12)

- #19 黄檗宗【おうばくしゅう】 禅宗の一派。開祖は明僧隠元隆(1654 来日)、本山は京都府宇治市の黄檗山万福寺(1661 開創)。隠元の禅は中国では臨済宗の一派にすぎなかったが、日本臨済宗の各派が鎌倉・室町時代に宋と元の禅を受け入れつつ日本化していたのに対し、黄檗山の禅は明朝禅であるところから、日本では独自の宗風を持つ一宗を形成した。念仏禅の禅風を有し、伽藍様式や法要・法具法服・修行様式などすべて明風であり、歴代住持も江戸中期までは中国僧が続いた。1874 年教部省の政策により臨済宗に合併したが、76 年に分離独立して黄檗宗を公称する。(*12)
- #20 新田【しんでん】 江戸時代にあらたに開墾された田畑のこと。中世以前には墾田といった。(*11)
- #21 下寺【しもでら】 上位の寺院の支配を受ける寺。
- #22 隠居寺【いんきょでら】 住職が隠居し、寺として公的特権のない寺。
- #23 引寺【ひきでら】 寺の名称、認可条件をすべて公的に認められて旧寺から引き継がれた寺。

出典・参考資料 (図書記号 []は国立市中央図書館、()は中央公民館)

- 1) くにたちの歴史 編纂 国立市 平成7(1995)年 [10・B1]
- 2) 国立市史 上中下 編纂 国立市 昭和63(1988)年 [10・B1]
- 3) 国立歳事記 原田重久 昭和44(1969)年 [10・B1]
- 4) 国立風土記 原田重久 迷水亭書屋 昭和42(1967)年 [10・B1]
- 5) わが町国立 原田重久 迷水亭書屋 昭和50(1975)年 (291)
- 6) くにたち歴史探訪ガイドブック 改訂版 平成16(2004)年 [10・C6]
- 7) くにたちの石造物を歩く 国立市教育委員会 1999年 [10・D8]
- 8) くにたちの寺院年中行事 一仏教儀式暦からみた国立市の一年ー 長沢利明 くにたち郷土文化館 研究概要 N05.2003.3)
- 9) 東の市境散歩 みんなでくにたちを歩こう健康ウォーキングマップ N0.6
- 11) 広辞苑第5版 三省堂 1998年 [R813]
- 12) 岩波日本史辞典 岩波書店 1999年 [R210]
- 13) 多摩ら・び 2002No.20 スケッチで見る谷保風景 関敏 けやき出版 2002年 [02・A5]
- 14) 日本の神仏の辞典 大島建彦他 大修館 2001年 [R162]
- 15) 日本歴史大系13(東京都の地名) 平凡社 2002年 [R291]
- 16) 国史大辞典13 吉川弘文館 1992年 [R291]
- 17) 日本人物文献目録 法政大学文学部史学研究室 1974年 [R281]
- 18) 日本人名大事典 平凡社 1938年 [R281]
- 19) 神社名鑑 神社本庁 1963年 [R175]
- 20) 総合佛教大辞典 法蔵館 2005年 [R180]
- 21) 日本仏教史辞典 今泉淑夫他 吉川弘文館 1999年 [R182]
- 22) 仏教語大辞典 昭和50年 中村元 東京書籍 [R162]